

萩山遺跡出土人骨

1. 緒言

当遺跡は、熊谷市千代に所在する遺跡である。火葬施設に短頸壺の蔵骨器に埋納された火葬骨が検出され、人骨は総重量 670 g である。通常、白人男性 1 体分の火葬骨の重量はほぼ 3kg であることを考慮すると、今回検出された分量は少ない。保存されている骨は大きくても 5 cm 以内四方の骨片、あるいはそれより細かい骨小片である。大きな骨片の表面には細かい亀裂が認められ、歪み、収縮が大きい。細かい破片、亀裂部によって裂けている状態である。骨片のほとんどは、灰白色を呈している。通常、江戸時代以前の焼骨は、部分的に黒色や炭化した部分があるが、当遺跡出土焼骨は、残っている全部が白色を呈する。骨質は緻密で、非常に絞まった骨質である。

焼骨については、イギリスやアメリカにおいて人類学や法医学の分野から研究がおこなわれている（Brothwell(1981), Buikstra & Ubelaker (1994), Krogman & Iscan(1986)）。それらを要約すると、火葬骨の色は火葬の際の焼成温度に左右され、焼成温度があがるにつれて、黒色から灰色、灰色から白色へと変化するという。熱を受ける前は有機物を含んだ白骨であるが、焼成温度が 500 度前後は黒色、600 度から 900 度は灰色から白色、900 度以上では白色や淡黄色となり、また、700 度以上では亀裂や収縮が起きる。また、灰白色や白色の細かい焼骨が残存場合、15%～30%の収縮を考慮しなければならないと報告されている（Ubelaker 1989）。さらに、人骨の状態と火葬方法は、遺体をそのまま火葬する方法と、再葬墓のように白骨化したものを火葬する 2 つの方法がある。遺体をそのまま火葬した場合、焼かれて残った骨は縦や横方向への亀裂が多く、その亀裂にそって割れて細くなる。ねじれや歪み、変形、収縮が著しい骨片となる。一方、一度白骨化（晒）した人骨を火葬（焼く）する再葬の場合は、亀裂が少なく、収縮やねじれ、変形もほとんどない。

以上のことから当遺跡より検出された焼骨の状態から判断すると、軟部がついた状態で焼成温度は 700 度～1000 度という高温で焼かれたと判断してよい。

2. 人骨所見

総重量：670g

頭蓋骨、四肢骨、椎骨、肋骨、寛骨などの全身の部位を確認できる。いずれかに偏った部位だけを選択して埋葬している痕跡はない。頭蓋骨（図版 ）には冠状縫合が確認できる。縫合には骨増殖の痕跡は確認できない。頭蓋骨の内外板には亀裂が見られるものの、生前のクモ膜課粒小窩や静脈溝の圧痕という加齢傾向の痕跡はまったくない。右上顎骨お

よび歯槽部（図版 ）が保存されている。歯槽部はほとんど開放状態であるが、右上顎犬歯の歯根が埋まったままである。歯槽の開放状態は以下の歯式のとおりである。

 = ○ ○ ○ ○ 3 ○ ○ |

上顎の内側は切歯縫合部分で破損しており、癒合していない縫合が顕著に認められる。癒合消失していないことから、比較的若い個体、30才以前のもので判断できる。また、遊離した歯根片と、大臼歯歯冠半分ほどが保存されている（図 ）。右下顎枝部分の下顎枝頭は破損している、下顎角の内側には顕著な隆起が確認でき、男性の可能性を伺える。

四肢骨では、大腿骨片や脛骨片の破片と思われるものが比較的多く残っている。それ以外に、上腕骨骨体破片とおもわれるものが7cm程度保存されている。三角筋粗面の箇所であり、わずかに熱による膨張の可能性が疑われるが、筋付着面の明瞭な隆起として判断して妥当であろう。しかし、断面は高温で長時間焼かれていたことを予測させるほど、緻密な断面である。寛骨部分の破片や、椎骨の海面質部分も頑丈に残っている。椎骨の椎体部分は粗造ではなく、骨粗鬆症の可能性は低い。

以上の特徴を総合的に考えると、当遺跡の出土人骨の性別は男性である。年齢は頭蓋縫合の開離状態や、切歯縫合の状態から、30才前の比較的若い個体の可能性が高い。

3. まとめ・結語

検出人骨は、人骨の特徴から30才前後の若い男性個体であると推測される。保存されている人骨に加齢による経年変化や、さらには疾病による変化もない。

なお、特質すべきこととして、人骨とともに獣骨（鳥類）の長管骨と思われる破片が3・4点検出されている（図版 ）。その長さは約3cm～4cm、径は3mm以下である。鳥類特有の中空状態の形態であり、わずかに骨体の一部に溝状のもの確認できる。さらに骨表面が他の人骨片と異なり、人工的に磨かれたような光沢と滑らかさがある。もともと1本の長いものであった可能性も考えられるが、現状では接合はできない。たとえば、長い簪や短い状態では首飾り等、装飾品として被葬者が生前装着していた可能性が高い。人骨と共に検出されるのは非常に珍しい検出例である。

謝辞

通常、焼骨が取り上げられ、年齢性別など詳細なことがわかりにくく、「焼骨一括」として取り扱われる状態がほとんどである。しかし、当遺跡出土の焼骨は、幸いにも非常に細かく丁寧に取り上げられ、クリーニング、分類された上での分析依頼であった。そのため、人骨鑑定が迅速かつ詳細に観察できただけでなく、「骨製品」「鳥類？」と思われる遺物を確認することができた（当研究部坂上和弘研究主幹による指摘）。このような貴重な機会を与えていただき、熊谷市森田氏をはじめとした関係者の皆様に心から感謝申し上げる次第

である。今回の事例から鑑み、焼骨一括として取り扱われたものを再度精査することで、人骨以外のものが検出される可能性は高いのではないかと思われる。今後、同様の類例の増加を期待したい。

参考文献

- 馬場悠男・梶ヶ山真里 2006 「被葬者の人類学的所見」『近世大名家墓所の調査』坂詰秀一編 池上本門寺
榎崎修一郎 2007 「火葬人骨と考古学」『墓と葬送の中世』狭川真一編
- Bothwell,D.R.1981 『Dingging up Bones』British Museum of Natural History
- Buikstras, J.E. & Ubelaker, D.H. 1994 『Standards for Data Collection from Human Skeletal Remains 』Arkansas Archeological Survey Research
- Krgman, W.M. & Iscan,M.Y. 1986 『The Human Skeleton in Forensic Medicine』 C.C. Thoms



